

知的発達障害の家族の日々



「あっぺ!」

知的障害をもつ弟についての、一番古いと思われる記憶。
おそらく弟が2歳後半の頃だろうか。とすると自分は4歳くらい。
弟は「あっぺ」で全てを表現する子どもだった。

「あっぺ↗」はますます上機嫌。

「あっぺ↘」は疑問形、または関心あり。

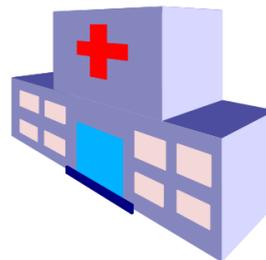
「あっぺ!」は不満、または要求。使用頻度が最も多い。

「もお!あっぺ!」が不満最大の活用形。

しゃべらない弟に対して何も思わなかったわけではなく、
でも明確に「なにか違う」と感じていたわけでもなく。

人が生まれた時からしゃべれるわけではないとは知っていた
ので、漠然と「いつしゃべるんだろう?」くらいに思っていた。

入院



幼い頃、弟は「よく入院するやつ」だった。

その点で、その頃から「ケアが必要な対象」という認識があったような気がする。

ある時、1年くらい入院せずに過ごしていた折りに「この頃あんまり入院しないね」とつぶやいて、縁起でもないことを言うなと親にたしなめられたこともあった。

入院には母親が付き添うことになり、母不在の間は、兄と私は他府県の祖母の家に預けられるか、祖母がしばらく家に滞在し世話をしてくれていた。

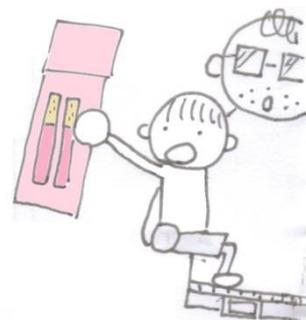
幼い頃の私は、腕の脱臼が癖になっていて、急に手を引っ張られるなど、ふとしたことで脱臼することがよくあった。初回こそ深夜の接骨院まで連れて行ってもらったが、あまりの頻度に、2度目からは母に骨接ぎしてもらうのが常となった。

弟の入院中、骨接ぎ係の不在が、私にとってネックとなった。

老眼鏡をかけ、家庭用の医学書を読みながらの祖母の骨接ぎは、拷問に等しい。結果、軽度の脱臼なら、自分で治すようになっていった。

弟の退院。鮮明に覚えているのは、帰宅した途端、普段は絶対開けない棚の中から、隠してあったイチゴのポッキーを見つけ、にんまり笑って食べ始めたこと。止めるのも怒るのも忘れて、食べる姿に見入っていた。

動物的な勘というか、妙に鋭いきゆう覚を持っていて、何となく「野性」を感じさせるものがあるのが、当時の弟だった。



私には知的障害をもつ弟がいます。12年前、今の職場に就職してから気づいたのですが、福祉現場で働く人の中には、兄弟や親族に障害を持った人がいる、という方が少なくありません。私と同じく、身近に障害を持った人がいることが、職業選択にも影響しているのだろうと思います。

一方で、そうした人からも、現在の話はともかく、過去どのように家族として過ごし育ててきたかという具体的なエピソードを聞くことはほとんどありません。専門職として支援に関わるようになっていくことが、却って昔のことを話すことを抑制するのかもしれない。

この連載では、障害を持った子と家族の日常を、ともに育った家族の視点から書き記していこうと思います。